

## はじめに

当連載の第11話では、大阪の都心部・上町台地界隈をフィールドに、地域でのイベントやイベントに関わる地域資源情報への注目の喚起を入り口として、居住地としての都心への愛着を育み、ひいては都心居住の主体の形成を促していくインターフェイスの一つとして、地域資源データベース「上町台地・cotocoto」(産学地域協働で開発した

す地域コミュニケーションデザイン実験である。

いずれも新たなつながりのデザインを志向した社会実験としての試みであり、地域の記憶や知恵を蓄積・共有していく文化装置として、つなぎ手となる地域資源情報に着目している。両者の企画・運営には、共通の主体がさまざまな形で関わっており、先行して開発された「上町台地・cotocoto」の現段階での弱みを補完する機能が、UICORoプロジェクトの実現過程でおのずと意識されてきた。両者をふまえて、当連載の第13話では、インターネットと

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発  
都心居住文化の創造へ  
(第14話)

# 地域資源情報による コミュニティ・ エンパワーメントの可能性(2)

インターネットによる情報システム)の開発のプロセスと有効性などについて紹介した(※1)。また、続く当連載の第12話では、大阪ガス実験集合住宅NEXT21/UICORoプロジェクトをとりあげ、建物一階小スペースのガラス・ウォール(ウインドウ)を活用した、地域資源にまつわる展示と関連イベントの開催による、情報発信の取り組みを紹介した(※2)。地域で活動する多様な主体や地域資源間のネットワークの拡張を主目的とし、あわせて地域資源への関心の喚起や地域資源を活用した活動への参加を促

いうヴァーチャルなインターフェイス(上町台地・cotocoto)が抱える課題に対して、UICORoを事例に、極めて小さくとも即地的な空間を拠点として、リアルなコミュニケーションによって成り立つインターフェイスの効果や可能性について検証している。

UICORoプロジェクトは、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所を主体に、企画・制作を担うワーキング・メンバーや地域住民をはじめとする多様な協力者、そして評価に関する共同研究の担い手としての京都大学大学院工学

研究科居住空間学講座(高田・神吉研究室)との協働によって進められている。第13話では、始動から約一年の段階におけるU-CoRoプロジェクトの評価に関する共同研究の成果の一部(当時京都大学大学院工学研究科居住空間学講座博士前期課程に在籍していた柴田尚子氏による修士論文「大阪都心部における地域資源の情報収集及び発信活動に関する研究―上町台地界隈におけるU-CoRoプロジェクトを通じて―」(二〇〇八年二月)(※3)をもとに、情報収集プロセスへの個々の関わりに着目した考察を行っている。

今回第14話では、前回調査途上で詳細にレポートできなかった、U-CoRoプロジェクト発足後の約一年間の展示や、イベントに協力者として関わった約四十名のうち十三名へのヒアリング調査報告から、いくつかのトピックを紹介する。同ヒアリング調査を通して、情報メディアとしてのU-CoRoの特性を再確認しながら、地域資源と人的資源の交流を促すコミュニティ・エンパワーメントの可能性について考えてみたい。

### プロジェクトへの協力者の カテゴリーから

ヒアリング調査のトピックを紹介する前に、まずU-CoRoプロジェクトへの協力者の所属類型を見ておきたい。協力者約四十名の所属類型は、地域の社寺関係者、地域のまちづくり団体関係者、地域住民・地縁団体関係者、公立博物館・図書館関係者、区役所関係者、大学関係者、その他団体関係者等である。活動の属性という観点から、対象者の特徴をカテゴリー化してみると(ヒアリングに同行した柴田尚子氏による分類)、地域資源を活かした活動を積極的に展開する複数の組織で構成されている

		考える会関係のみ									考える会関係+地縁					地縁的な活動組織のみ					その他の活動組織																					
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	
活動主体の所属している組織	考える会とそれに関わる組織	まじゅり	○								○	○	○	○	○	○																										
		からほり倶楽部		○	○	○				○						○																										
		應典院寺町倶楽部										○																														
		西代官山クラブ										○																														
		なにわ人形芝居フェスティバル事務局										○																														
	福祉	福祉	○	○																																						
	上町台地界隈の地縁的な活動組織	まじゅり										○						○	○								○	○														
		神社奉賛会												○																												
		町内会役員												○																												
		地蔵盆保存会													○																											
		空堀商店街振興組合														○																										
	福祉	福祉																																								
	公的な組織	まじゅり																																								
		市役所・区役所															○																									
		大阪大学コミュニケーションデザインセンター															○																									
	その他地域の地域資源に関する活動組織	まじゅり																																								
		博物館																																								
		図書館																																								
	NEXT21関係組織	福祉																																								
		保護司等福祉系組織																																								
活動主体のU-CoRoプロジェクトとの関わり方	まじゅり																																									
	博物館(私設)																																									
	災害関係NPO																																									
	その他NPO																																									
テーマ内容に沿った個人の紹介	福祉																																									
	日本野鳥の会大阪支部																																									
	造園事務所																																									
	第1回「祭り」	人	資								資	資	地		資	資	資	資																								
第2回「遊び」																																										
第3回「減災」																																										
第4回「野鳥」																																										

図1 U-CoRoプロジェクト発足後約1年間の展示・イベントへの協力者40名に見る所属類型(柴田尚子氏による作図(※3))  
 ※図中の○は現在所属している組織、●は以前所属していた組織、グレーは柴田氏がヒアリングに同行した対象者、「人」は「テーマ内容にそった個人を紹介」、「資」は「資料を提供」、「エ」は「イベントを紹介」、「イ」は「イベントで講師」、「冊」は「冊子を設置」、「地」は「地図データを提供」、「共」は「共催者として参加」、「考える会」は「上町台地からまちを考える会」の意。

「上町台地からまちを考える会」に関わっている人、「上町台地からまちを考える会」と地縁団体の両方に関わっている人、地縁団体だけに関わっている人、その他の活動組織に関わっている人の四つのグループで捉えることができる。

前記四つの活動属性で整理した図1(ヒアリング調査に同行した柴田尚子氏による作図)を見ると、U・C・O・Rプロジェクトに内在するいくつかの特性がうかがえる。一つは、展示テーマの設定を少しずつ変化させ、情報収集プロセスへの多様な主体の参加の入り口を設けることによつて、四つの活動属性すべてに及ぶネットワークの構築が図られていることである。例えば、まちづくり活動団体同士のネットワークでは関係を築きにくい、地縁団体関係者とのつながりを可能にするインターフェイスとして、展示テーマの設定が機能していることが見て取れる。また、地域外の専門家等を具体的なテーマによって地域に結び付けていくことで、地域資源と人的資源の発展的な交流と価値創造の可能性を開発していることが推測できる。

これらの特性は、高田光雄氏が説く、持続可能で多様な価値観を受容するまちづくりのためのタイトでオープンなコモンズのあり方(これからのまちづくりを支える連携と持続の仕組み)への、有効なインターフェイスとなり得ることを物語っていると見てもよいのではないだろうか。

## ヒアリング対象者の声から

ヒアリング調査は、U・C・O・Rプロジェクト発足後、約一年間、第1回～第4回の展示プログラム(図2)と第1回～第3回までの関連イベント(図3)に協力者として関わった約四十名のうちの三十三名を対象に行った。U・C・O・

Rプロジェクトの主体である大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所による調査であるが、同ワーキングのメンバーで、地域住民やまちづくり関係者からの情報収集を中心に担っている早川厚志氏に委託する形で実施した。

ヒアリング対象となった三十三名の所属類型の内訳は、地域の社寺関係者六名、地域のまちづくり団体関係者八名、地域住民・地縁団体関係者十三名(内NEXT21が立地する町内三名)、公立博物館・図書館関係者二名、区役所関係者一名、大学関係者二名、その他団体関係者一名である。「NEXT21やU・C・O・Rに関する事前の認知度」、「U・C・O・Rプロジェクトに協力した理由」、「U・C・O・Rの印象や展示・イベントの感想」、「U・C・O・Rプロジェクトに関わって得たこと」、「U・C・O・Rプロジェクトへの要望・提案」について聞いている。

本稿では、早川氏による報告書からトピックの一部を抜粋紹介し、U・C・O・Rプロジェクトの協力者たちの声に耳を傾けるとともに、筆者の私見もまじえつつ、U・C・O・Rから見えてくる地域コミュニケーションデザインの要点を探ってみたい。

### (1) 協力のきっかけから

浮かび上がるまちづくりへの示唆

ヒアリング項目のうち、U・C・O・Rの展示に協力したきっかけや協力しようと考えた理由に関する回答にふれておきたい。結果を分類すると、「趣旨に賛同」、「地域のため」、「ワーキング・メンバーを既知あるいは信頼関係の存在」、「ワーキング・メンバーの紹介先を既知あるいは信頼関係の存在」、「大阪ガスという信頼感」の五つの要素を捉えるこ

	第1回	第2回	第3回	第4回
テーマ領域	地域文化の再発見	多世代・多文化共生	減災文化の創造	自然・環境の再生
展示タイトル	上町台地まつり絵巻	上町台地子どもと遊び いま・むかし	「いのちをまもる知恵」を伝える 減災に挑む30の風景と上町台地災害史	緑と鳥の回廊、上町台地
開催期間	2007年2月5日～4月28日	2007年5月14日～8月31日	2007年9月3日～12月28日	2008年1月21日～5月9日
				

図2 U・C・O・Rプロジェクト第1回～第4回までのウィンドウ・エキジビション(展示)

とができる。中でも「趣旨に賛同」とするケースと「地域のため」とするケースの中に、次のような特徴的な傾向が見られる。

●趣旨に賛同

まず、U・C・O・R・Oの設立目的や展示の趣旨に賛同したと答えたヒアリング対象者が半数以上見られた。その中身を尋ねると「地域情報を紹介すること」、「マンションと地域をつなぐこと」、「個々の展示テーマについて知ってもらおうこと」という二つの理由に大別される。(中略)

「マンションと地域をつなぐこと」については、ヒアリング対象者の中でも、地域住民に多く見られた。近年の超高層マンションの建設ラッシュなどにより、人口増が続く地域事情が背景にあるように考えられる。(後略)

●地域のため

次に「地域のため」を挙げるヒアリング対象者が多く見られた。ここで言う「地域」とは、広く「大阪全体」を指す人も一部には見られたが、その多くは「上町台地」という括り方を表す人、居住するあるいは活動する地域：町会や小学校区レベルをその範囲とする人に分けられる。

「上町台地」という括り方を表す人は、博物館・図書館などの関係者、社寺関係者に多く見られた。一方、居住する地域など狭い地域を指す人は、地域住民に多く見られた。

ヒアリング対象者一人ひとりの日頃の活動範囲や活動対象地域、居住しているか否かが、その差を生んでいると推測される。

この二つに見られる特徴は、これからのまちづくりに対する大きな示唆を与えてくれているものだと考えられる。地域のソーシャル・キャピタル(社会関係資本)の継承のために、新住民を含めて地域の記憶や知恵を蓄積・共有していく文化装置が必要であることについて、地域の中で切実なニーズが芽生えてきている様子がうかがえる。一方で、新住民を含めた多様な価値観を受容していくには、地域に根差しながら既存の地域運営の枠組みを越え、これからのまちづくりを持続的に支えることのできるオープンかつタイトな地域資源と人的資源の交流とネットワークの仕組みを構築していく必要がある。その際に、地域生活に寄り添って存在しながら、地域と外部をつなぎネットワークを拡張するための媒介者となり得る存在として、寺社や博物館・図書館などのまちづくりにおける新たな役割が見出せる。寺社や博物館・図書館関係者の多くが、「上町台地」という視野の提供者であることに象徴されている。

(2) U・C・O・R・Oに関わって得たことに

見る新たな出会いの形

次に、U・C・O・R・Oプロジェクトに内在する特性を、もつとも如実に引き出していると思われるのが、U・C・O・R・Oに関わって得たことに関する回答である。展示やイベントへの協力や参加を通して、何か得たものがあるかどうかを尋ねているのだが、回答の多くからU・C・O・R・Oプロジェクトとの関係を通しての出会いや気づきを自らの生活や実践活動の中でアクティブに受け止めている様子を垣間見ることができる。




	第1回	第2回	第3回
テーマ領域	地域文化の再発見	多世代・多文化共生	減災文化の創造
イベントタイトル	上町台地のまつりを紐解く スペシャル・トーク	夏の終わりに振り返る 子ども、うえまち、いま・むかし	減災Cafe in 上町台地
開催期間	2007年4月29日	2007年8月25日	2007年12月19日
			

図3 U-CoRoプロジェクト第1回～第3回までの関連イベント

● 地域情報との出会い

それぞれのテーマの展示内容、展示方法を通じて「知らなかった地域情報を得た」というヒアリング対象者が多く見られた。

展示内容の中から知らなかった地域情報を得た例としては、「これだけたくさん祭りの祭りやイベントが行われているとは」（まつり絵巻展）、「こんなところで遊んでいたとは」（子どもと遊び展）、「上町台地でも昔は災害があったとは」（減災展）、「ウグイスの鳴き声が聞こえる地域もあるとは」（緑と野鳥展）といった声があった。

また、展示方法では「野鳥と緑を結び付けるところ、地図風に見えるのか」（緑と野鳥展）というように、地図を使った展示によって、地域情報に関するこれまでにない視点を得た例も見られた。

● 人との出会い

それぞれのテーマごとに、展示の終盤に「クロージング・イベント」と題した催しを開催したが、それに参加したヒアリング対象者からは、人との出合いを挙げる声が多く聞かれた。

まず、クロージング・イベントごとのメイン・ゲストとの出合いを挙げる人が多く見られた。（中略）次にイベントに来ていた参加者同士の出合いを挙げる人が多く見られた。初めて会う人との出合い、知ってはいたが話す機会のなかった人との出合いを具体的な名前を挙げながら答える人が多く、一様にうれしそうに、そのときを振り返っていたのが印象的である。

また、「これまで知っていた人たちの違う一面を見ることができた」という人も見られた。例えば、「地元神社の宮司がこういう場にも関わっていることを初めて知った」とか、「知人が阪神・淡路大震災の被災者だったことを初めて知った」というように、イベントでの語りや

知人同士が別々にイベントにやってきたことによって知る側面があることも、今回のヒアリングを通じて浮き彫りになった。

展示を通しての出合いも見られた。通学にも使ったトローリーバスの想い出や板きれにコロを付けて坂を滑り降りる遊びなどを共有する人が、上町台地の他地域に居ることを知り、感慨にふける話も聞かれた。

● 考える機会との出会い

それぞれのテーマから何かしら考える機会を得たという声も聞かれた。また、テーマがちょうど考えていたこととタイミングよく合ったという人も見られた。

ある神社関係者は、災害時に神社が避難所になる場合の対応について考えはじめていたときに「減災展」と出会っており、その際のクロージング・イベントにも強い参加意欲を持っていた。

また、「子どもと遊び展」での、昔の何気ないスナップから街並みや時代を感じ取る手法を知り、UICOROでのこれからのテーマ候補に、家庭にある古写真を活かせるテーマを挙げる人も見られた。

● 展示のあり方との出会い

地域情報を展示するということや、展示方法との出合いについて挙げる人も見られた。

UICOROが小さなスペースであることやまち中にあることは、博物館や美術館などにはない特徴であり、そこに「可能性を感じた」という人がいた。また、地図を使った表現にもできる限り取り組んでいることで、「テーマ」との地図を重ね合わせることができれば、上町台地の地域資源の重層性が表現される可能性を見出せる」という人もいた。（後略）

● 上町台地との出会い

上町台地の新たな側面を知ったり、地域資源の豊か

さを再認識したりしたことなどを挙げる人も見られた。前項でも挙げたが、テーマごとの地図を重ね合わせることで、上町台地の地域資源の重層性を改めて感じることができたという声があった。テーマは多様であり、すべてに興味を抱く人は少ないかもしれないが、関心のあるテーマと薄いテーマを、地図を使って重ね合わせることで、上町台地の知られざる側面が見えた可能性はある。

こうしたアクティブな言動は、第13話でも明らかにした情報収集プロセスへの関わりに由来していると見ていだろう。地域の声の取材と収集がもたらす効果とともに、現物展示や地図との関連づけなどの手法によって、情報のリアリティや生活との連続性が立ち上がり、個人の知恵や記憶がパブリックな資源に転じていくダイナミズムを感じ取れたのではないだろうか。

誌幅の都合で、ヒアリング項目のうち一部のトピックの紹介となったが、例えば、ヒアリング項目のうち「U-COROプロジェクトへの要望」提案などでは、不十分な要素も諸々指摘されている。PRの充実や展示空間への近づきやすさの改善や双方向コミュニケーションの工夫、展示パネルの再利用（地域還元）などである。

## 第一四話のおわりに

連載第13話・第14話の二回を通して、NEXT21入居者へのアンケート調査と協力者へのヒアリング調査をもとに、地域の記憶や知恵を蓄積・共有する文化装置としてのU-COROプロジェクトの効果と可能性について考察してきた。第13話では、情報収集プロセスに関わること

によって生まれるアクティブな思考や行動に着目し、情報の受け手から情報提供の主体への転化を可能にする仕掛けの重要性を明らかにした。第14話では、その重要性を再確認するとともに、新住民を含めた多様な価値観を受容する地域運営が求められているなか、既存のシステムの枠組みを越え、これからのまちづくりを持続的に支えることのできるオープンかつタイトな交流とネットワークの仕組みを構築していく必要性と、そのために有効なインターフェイスとしてのU-COROプロジェクトの特性を探った。そこで浮かび上がってきたのは、即地的なリアリティに根差すと同時に、ネットワークの拡張因子を持つプログラムのあり方である。次号以降でU-COROプロジェクト二年目の実践を紹介しながら、その成果が物語る意味を読み解いていきたい。

（大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所客員研究員）

（※1）産学地域協働の実践研究プロジェクト地域資源データベース「上町台地 cotocoto」(<http://nemachi.cotocoto.jp/>)の概要は、季刊誌「CEL」八一号「大阪・上町台地発 都心居住文化の創造へ」（第11話）で紹介

[http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel\\_81\\_20.pdf](http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel_81_20.pdf)

（※2）NEXT21第3フェーズ居住実験の一環としての地域コミュニケーションデザイン実験（U-COROプロジェクト）の概要は、季刊誌「CEL」八三号「大阪・上町台地発 都心居住文化の創造へ」（第12話）で紹介

[http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel\\_83\\_21.pdf](http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel_83_21.pdf)

（※3）柴田尚子氏による修士論文「大阪都心部における地域資源の情報収集及び発信活動に関する研究―上町台地境界におけるU-COROプロジェクトを通じて―」（二〇〇八年二月／京都大学大学院工学研究科居住空間学講座博士前期課程）の概要は、季刊誌「CEL」八四号「大阪・上町台地発 都心居住文化の創造へ」（第13話）で紹介

[http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel\\_84\\_21.pdf](http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel_84_21.pdf)